



6.三重大ブランドの環境教育

三重大ブランドの環境教育プログラムは大きく2つのプログラム、「持続可能な開発のための教育 (ESD) プログラム」および「国際環境教育プログラム」で構成されます。学生は各学部において、共通教育の課程としてこのカリキュラムを受講することができます。

持続可能な開発のための教育 (ESD: Education for Sustainable Development) プログラム

1. カリキュラムの概要

“世界一の環境先進大学を目指す” 本学は、環境人財の育成に力を入れており、平成25年度からグローバルに活躍する環境スペシャリストを養成すべく、「**持続可能な開発のための教育 (ESD) プログラム**」を開始しました。

環境問題は経済活動や人々の生活と密接に関連しており、早急な社会的覚醒と政策的対応が求められており、世界は国際的に活躍する環境人財を必要としています。持続可能な開発のための教育 (ESD) プログラムは、そうした時代の要請に応じて、環境意識と環境資格を備えた人財の育成を念頭に構成されており、自ら目標を立て将来的に付加価値を高めていくことで、将来にわたって持続可能な社会を構築する担い手を育む教育を行い、本学の教育理念の一つである「生きる力」を身につけること

をプログラムのねらいとしています。プログラムは、本学独自の環境教育を通して、地球規模の視野を持ち、世界や地域で活躍する人財を育て、環境活動への実践的な取組方法や環境関連の資格取得のための効果的な学習等ができるように考えられています。

修了要件は、共通教育主題G (環境問題と人間社会) に属する科目から4単位、持続可能な開発のための教育プログラム授業群 (共通教育主題A~I) から6単位の計10単位を取得することで修了することができます。

プログラムの修了要件を満たすことで、学長より修了証が授与され、学生にとっては履歴書などへ記載することで社会に広くアピールすることができます。

三重大ブランドの環境教育

2. 平成25年度の成果

平成25年度は、320人の学生が修了に必要な単位を修得しました。

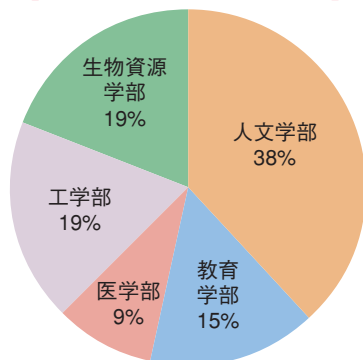
表1にその内訳を示します。

【表1：学部別修了者数】

学部	人数	割合 (%)
人文学部	122	38.1
教育学部	49	15.3
医学部	29	9.1
工学部	59	18.4
生物資源学部	61	19.1
計	320	100.0

また、その割合をグラフにしたものを図1に示します。人文学部が全体のおよそ40%弱を占めており、工学と生物資源学部が20%弱、以下教育学部、医学部と一部偏りがありますが、すべての学部の学生に修了証の発行を行いました。

【図1：修了者の学部毎の割合】



持続可能な開発のための教育 (ESD) プログラム修了証授与式 (H26.4.25)

表2に学部別の平成25年度入学在籍者に対する認定者の割合を示します。ここでも人文学部が36.0%と修得率が最も多く、ついで生物資源学部、教育学部が約20%となっています。なお、全体の修得率は20.1%でした。

なお、このうち35人の学生に対して平成26年4月25日、学長室にて授与式を行い、学長より修了証の授与を行いました。

【表2：平成25年度入学在籍者数における学部別修了者の割合】

学部	平成25年度入学在籍者数	修了者数	割合 (%)
人文学部	292	105	36.0
教育学部	215	41	19.1
医学部	205	27	13.2
工学部	418	50	12.0
生物資源学部	263	57	21.7
計	1,393	280	20.1

6. 三重大ブランドの環境教育

今年度からの取り組みとして、ESDプログラムに対する関心をより多くの学生に持ってもらうことを目的として、7月、10月、2月の年3回「ESDプログラム説明会」を昼休みに開催しました。昼食の時間を利用した短い時間ですが、3回で合計30名ほどの参加者に、ESDプログラムの内容説明や平成26年度に開催される「持続可能な開発のための教育（ESD）」に関するユネスコ世界会議（平成26年11月10日～12日、名古屋市）」のパートナーシップ事業である「ESD in 三重2014」についての説明を行いました。なお、修了した学生に対しては、環境ISO学生委員会や国際環境インターンシップ、「ESD in 三重2014」事業へなどの積極的な参加を期待しています。また、参加を希望した学生のサポート（国際環境インターンシップ

の英語教育など）も行っていく予定になっています。



ESD説明会ポスター

3. 環境インターンシップ

★環境インターンシップは企業・NPOにおける環境実務への参加を通して、企業やNPOの行っている環境活動に対する理解を深めると共に、実務に必要なスキル・態度を習得することをねらいとしています。平成25年度の環境インターンシップは6機関で行われ、合計19名の学生がインターンシップに参加しました。受け入れ先は表3のとおりです。

【表3：環境インターンシップ受け入れ先】

株式会社 東芝（四日市工場）	1名
ミキモト真珠島 真珠博物館	6名
伊勢商工会議所	6名
亀山市 環境保全対策室	3名
三重県地球温暖化防止活動推進センター	1名
NPO法人 地域の未来・志援センター	2名

国際環境教育プログラム

本学は、「三重から世界へ」という教育理念の基、平成21年6月に韓国・中国・モンゴル・ロシア・タイ・インドネシア・オーストラリア・アメリカ・日本の9カ国33大学と、「アジア・太平洋大学環境コンソーシアム」を構築し、環境教育プログラムの開発、交流を行い、交際的視野を持つ国際環境教育を行っています。特に、海外の企業や国連

関連の国際機関での国際環境インターンシップを実施し、国際感覚を育み、実践外国語力を高めています。平成25年度は11月8日から25日の期間で実施され、4名の学生が韓国世宗大学、およびソウル市内の企業を訪問し、現地学生との交流や、歴史・文化施設の見学などを行いました。



冬季特別プログラム終了式
(H26.2.12)



短期留学生四日市学習会
(H26.2.4)

エネルギー環境教育

本学ではスマートキャンパスなどのエネルギー使用状況の見える化や使用と発電のエネルギー管理をはじめ、学内のエネルギー需給に関する教育を授業など通じて実

施しています。また、節電や省エネルギー活動も積極的に学生と教職員が共に実施しています。

平成25年度「大学生および地域の環境リーダーを対象としたエネルギー環境教育」

本学の教育的資源を活用し、学生の環境意識の向上を図ると同時に、地域の環境リーダーと連携を図ることから学ぶことができる教育プログラムの構成となったエネルギー環境教育は、本学と中部電力株式会社との連携によるエネルギー環境教育協働事業を行いました。

平成25年は、次の7つの側面からエネルギー環境教育を行いました。

- (1) 本学の共通教育の主題G「環境と持続発展教育」の「四日市公害から学ぶ四日市学」の授業に、中部電力株式会社の職員を講師として、エネルギー環境教育を行った。
- (2) 環境ISO学生委員会委員が中心となって、中部電力株式会社の温暖化対策、エネルギー対策およびエネルギー環境教育に関するパネル作成を行った。
- (3) スマートキャンパス/スマートコミュニティの創出をテ

マとする環境座談会に中部電力株式会社環境部長を招き、浜岡原子力発電所の地震・津波対策の強化、再生可能エネルギーの安定化対策などについて意見交換を行った。

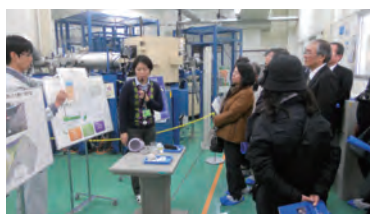
- (4) 本学の教職員および地域の環境リーダーを対象に、独立行政法人日本原子力研究開発機構 東濃地科学センターの瑞浪超深地層研究所およびベレトロン年代測定装置の施設見学会を実施した。
- (5) 本学の学生や教職員、地域の環境リーダーを対象に、海の博物館と海女小屋、中電答志島海底ケーブルの見学会を実施した。
- (6) 韓国世宗大学の短期留学生を対象に、エネルギー国際環境インターンシップを行った。
- (7) 三重県内の小中高大学の関係者および地域の環境リーダーを対象に、中電答志島海底ケーブルの見学会の報告を行った。

三重大学エネルギー環境教育プログラム施設見学会

● 実施日：平成25年12月2日(月)

● 施設見学：

独立行政法人 日本原子力研究開発機構 (JAEA) 東濃地科学センター瑞浪超深層地層研究所 (瑞浪市) と、同センターベレトロン年代測定装置 (土岐市)



独立行政法人 日本原子力研究開発機構 (JAEA)
東濃地科学センター瑞浪超深層地層研究所 (瑞浪市)



同センターベレトロン年代測定装置
(土岐市)

独立行政法人 日本原子力研究開発機構 (JAEA) は、国の基盤研究開発の一環である高レベル核廃棄物の地層処分・研究開発部門として、高濃度核廃棄物の地層処分に関する基礎的な研究を行っています。今回施設見学をした岐阜県瑞浪市、土岐市にある東濃地科学センターは、地層処分研究開発部門の、「花崗岩 (結晶質岩)・淡水系・硬岩」地における研究を行い、立坑や水平坑道の掘削を行い、岩盤の地質や強さ、地下水の流れや水質等の研究が進められています。

平成25年12月時点での掘削深度は約500mであり、深度300m地点に水平坑道が設けられ、最終的には、深度1,000mまでの立坑が設置される計画であり、世界的にも例を見ない大深度の地下空間施設となる計画です。

東濃地科学センター瑞浪超地層研究所では、主として花崗岩を対象として、「実際の地質環境への地層処分

技術の適用性確認」や「地層処分システムの長期挙動の理解」を目標として、深地層の科学的研究、工学技術の信頼性向上や安全評価手法の高度化等の研究課題等の地層処分研究開発を行っており、それらの研究成果に基づく「知識ベースの開発、知識管理システムの構築」を目標としています。

瑞浪超地層研究所の見学は、エレベーターにより地下深度300mの水平坑道に降り立ち、内部は100mごとに水平坑道があり、ガス濃度計、歪み計、地下水の水質測定計、地震計等の測定機器の運用状況と、超深地層における地震の伝播や万一ガラス固化されステンレス容器に封入された高濃度放射性廃棄物が漏えいた場合の地下水への影響・挙動等について調査が行われている様子を見学を行いました。